

---

# 宵闇のEVA

ura

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

宵闇のEVA

### 【コード】

N0653L

### 【作者名】

Ura

### 【あらすじ】

新世紀エヴァンゲリオンを中心にいろいろ混ぜて、宵闇眩燈草紙風味にできればと思っています。

## 第1話

### 第1話

使途襲撃 . . . . 10年前 日本

初号機機動実験開始5分後

被験者の夫と息子の見守る中、実験は予想外の展開を見せていた。

「初号機過剰シンクロです。制御できません!!!!」

測定機の前にすわっているオペレーターの一人が悲鳴にも似た声を上げた。

この研究所の幹部でもある夫は、実験の中断を即座に決めた。

「電源を落とせ、プラグ強制排除!」

「駄目です。受け付けません。」

別のオペレーターが制御不能に落いったと答えを返した。

最初のオペレーターがとまどったような声で報告する。

「被験者 . . . . .」

応じる被験者の夫の声には怒気が混じっていた。

「どうした!」

「被験者の存在を確認できません……。」

「何だつて？」

夫の呆けたような声がなぜかよく響いた……。

悲鳴と怒号が飛び交う中、小さな男の子は涙を浮かべながら一部始終を見届けていた。

使途襲撃 ……5年前 日本

「……つまり、真治は家出した？」

遠縁の親戚に預けた彼の息子は、最近オカルトに興味を示していたそうだが、魔術を極めるなどと、訳の分からない書置きを残して家を出て三日も帰ってこないとの連絡だった。

多額の養育費を受け取っておきながら、なんとと言う無責任なことだろう。

彼はすぐに、警察のみならず、自分の組織まで動員して息子を探し出そうとした。

彼の息子は、現時点での、使途迎撃、最終目的への鍵でもあるのだ。いないという事ならば、全ての計画が狂ってしまうのだ。

使途襲撃 ……2年前 ドイツ

明日香は、早熟な少女だった。頭の回転が速い彼女は、周り事象に次々と興味を示し、そして飽きていった。

近頃では同世代の子供たちとは、全く会話が成り立たなかった。卓越した知能を周りが認め、英才教育を施したのだが、残念ながら同世代の子供たちと遊ぶ方法までは教えられなかったのだ。

そんな彼女だが、この日の晩だけは好奇心を優先させた。たまたま、母親の見舞いにいけなくなったのが原因だったかも知れない。監視役の護衛が目を離れたのが悪かったのかもしれない。自由な時間が出来、監視の目がなくなった瞬間を彼女は逃さなかったのだ。

初めての夜の町というのは、実に刺激的だった。もう少し、成長していれば男達が放っておかなかっただろうが、今はまだ、異性の興味を引ける存在ではなかった。

しかし、誘拐犯の目には止まったのだった。怪しげな男が近づいてくるのを悟った彼女はすばやく逃げ出した。しかし、もう安全だと角を曲がったところで待ち伏せされたのだった。いきなり羽交い絞めにされたが彼女は怯まなかった。暴漢の手に思いつきり噛み付き精一杯の抵抗を示した。

「何しやがる！！」

暴漢の拳、反射的に動く訓練された体、かわし、反撃する。しかし、体重差はどうしようもなかった。男は痛打を受けながらも、小生意気に反撃されたことに男はさらに逆上した。

当初の身代金目的は、とつくに忘れ去り、ナイフを取り出し切り付ける。それでもかわす、明日香、だが、一筋、二筋と刃は彼女の体を掠り始めた・・・

初めて味わう、死の恐怖に動きはぎこちなくなり、大ぶりの一撃を交わした時に、足を絡ませて倒れてしまった・・・。

男にのしかられ、服をナイフではがされ、ついに恐怖に負けて、悲鳴を上げようかというときに、酷く醒めたが、幼い声が響いた・・・。

「無様な人・・・、そんな子供にナイフがいるなんてね・・・」

声の主、どう見ても自分と同年代以下にしか見えない東洋系の少女がそこにいた。

殺気立った目をした男がナイフを少女に走らせるが、彼女は怯まなかった。そして、かわさなかった。前に踏み込み、手を取り、・・・男が一回転する。コンクリートに叩き付けられ白目を剥いた男を彼女は鼻で笑って、鎖骨を狙い踏みつけた。

「左肩で感謝しなさい。腕が使えても人に迷惑しかかけられないのね?」

「ねえ?」

少女は、醒めた表情と斜に構えた雰囲気纏っていた。

明日香は、ぼろぼろになった服にも、流れ出す血にも構わず、起き上がった。

そして、右肩の鎖骨は私に折らせない。と物騒なことを口走った。

「なら、とつとと済ませなよ。人が集まってくるよ?」

ええ、そうするわよ。と。明日香は躊躇なく暴漢の鎖骨めがけて踵を踏み込んだ。

真治は、ためらいのない子だなあーという感想を抱きつつ、その様子を眺めていた。

「ああ、助けてくれてありがとうというべきなのよね?言葉上手いわね?ドイツ生まれ?」

ああ、忘れていたという口調で明日香が話し掛けた。彼女自身の視線は、暴漢に釘付けだった。

「いや、日本人だ。生まれも育ちも日本。」

真治は、きつと、さらに復讐するのが良いか、ここで終わらせるのが良いか悩んでいるんだろうなと予想しつつ、返答を返す。たとえ人からどう言われ様とも、日本人であることと男であることが、彼の彼たる所以に成りつつあった……。

「そう、でも上手よ。ドイツ育ちの私が保証する。助けくれたついでというわけじゃないのだけど、上着を貸してくれないかしら……。血で汚れるから……、買い取らせて欲しいというべきよね。」

明日香は流暢な日本語で少女に話し掛けた。

「悪いけど、このコートは特殊なんだ。だから、売れない。でも……、そうだね。そんな格好じゃ、出歩けないね。」

真治は、明日香に貸すためにコートを脱いだ。コートの下はユニセックスもので有名なブランドのシャツとパンツだった。

「この先のホテルに宿を取っている。そこでシャワーを浴びて、怪我の手当てをして、僕の服を貸すよ。サイズが合うといいんだけどね?」

「僕? ああ、ごめんなさい。なんて自分ことを呼ぼうと自由よね。ありがたく貸してもらっわ。」

助けてもらった上に、服まで借りるのだ。そんな仔細なことを指摘

するのは無礼だと明日香は考え直した。

・

・

・

「あんたいったいどんなホテルに泊まっているのよ？」

そこは、超高級ホテルの裏手だった。日本は比較的早くセカンドインパクトの混乱から回復した為、セカンドインパクト前よりも相対的に豊かな国と化していた。それでも、このホテルは簡単には泊まれないはずだった。

金銭だけではなく、社会的地位も要求されるホテルだ。この少女の親は何者なのだろうと首を捻った。

部屋でシャワーを浴び終え出てきた明日香に、少女はベッドに腰掛けたまま、手招きをした。

「そのまま裸でこっちに来て・・・」

少女の傍らに、包帯と医薬品が置いてなければ、勘違いしそうなシチュエーションだった。

「私は、そっちの趣味はないのよ？」

「そう、残念ね。」

ジョークをあっさり流されて、少しすねて見せた。

「さあ、傷を良く見せて、・・・」

少女は手際よく手当てしていくが、消毒して包帯を巻く前にもう一度薬を塗るしぐさをするのが気になった。少女の手際の良さから、何らかの訓練を受けているのは間違いなかった。だが、訓練を受けているのなら、その作業が不要と知っているはずだった。それになぞられた後、傷からやさしい温かさが体に広がるのだった。妙に思いつつも、黙ってみているとすぐに手当ては終了した。

「体に傷が残るかもしれないって割には、冷静よね？ 女の子って気にするものでしょう?」

まるで、自分が女の子でないような言い方をする子ねと思いつつ、ようやく、相手の名前を聞いていないことに気づいた。

「私は明日香、あなたは?」

いまさらながらの自己紹介に、少女は短い自己紹介で応じた。

「僕は真治だよ。」

明日香は、聞き間違えたのかしらという表情とともに確認した。

「僕は真治?」

明日香は、腕を真治の胸に伸ばし、ふくらみがあることを確認した。

「なんで女のアなたが真治なのよ。」

「いや、僕は男で真治なんだ。いまはいろいろあつて女の子をして  
いるけどね。」

良くあるやり取りなのだろう、少女の返答は澀みなかった。

「オカマ？ ニューハーフ？ 性転換？」

からかうような明日香の問いに、真治も適当に肩をすくめることで  
応じた。

まあいいわ。と肩をすくめて、明日香は最初の質問に戻った。

「傷のことだけどね。私は戦士なのよ。戦士に傷があるのは当然よ  
！ だから、これぐらいの傷は気にもしない。」

強がって見せる明日香に、真治は言葉のままにに応じて見せた。

「少女兵士なの？ 明日香の体格で兵隊さんするのは大変だよね。」

「国防軍じゃないわよ。ネルフよ。」

「ネルフって人手不足なんだね・・・」

心底同情するよという口調に明日香の何かがはじけた。

「なんでよ。ドイツ支部 エヴァンゲリオン 2号機パイロットの  
明日香・惣流・ラングレー・・・なんで、そんな不思議そうな顔で

こつちを見ているのよ？ 人類の守護者なのよ、この程度の傷で、あら？」

勢い良く解いた包帯の下には傷一つ残っていないかった。他の傷があった場所を開けてみるがやはり傷は残っていないかった。

あっさりと自分の身分を自慢する明日香に、真治は本気であきれていた。

自分が世界でも代わりの利かない人材だと誇るのなら単身で出歩くべきではないのだ。

自分が誰であるか紹介すべきではないのだ。とくにネルフとやらの影響下に居ないときには。

「明日香、君、軽率すぎだよ。戦士にも兵士にも向いてないと思う。」

明日香は、あきれ返られていることにも気づかず、じっと傷を確認していた。

「どうして、傷が消えているのよ……。」  
自身に起こった不可思議な現象が、錯覚でないかと確かめるように、傷をなぞりながらかの問うた。何故だと……。

真治は、肩をすぼめるジェスチャーをして見せた。

「僕は男で魔術使いだ。魔術儀式でしくじって、今は女の子をやっている。て言ったら信じるかい？」

明日香には、その投げやりなしぐさは見えていなかった。

「魔法かどうかなんてどうでもいいのよ。傷以外でも治せるの？」

「状況によるよ。」

投げやりな返事にも明日香はめげなかった。

母親を元に戻せる可能性が目の前にあるのだ。

「精神病の類でも？」

「どんな方法でも良いっていうならね。でも、僕は高いよ？」

勢いよく尋ねてくる明日香に対して、真治はどこまでも投げやりだった。

「払うわよ、ママの口座には、数十万ドルあるもの。」  
その態度も今の明日香には気にならない。

「全部もらわなければ割に合わないよ。」

実際、魔術で治療する際にはそれ以上の金額を受け取っていた。

「ええ払うわ。だから、ママを治して。」

結局、真治は明日香に押し切られてしまった。

## 第2話

使途襲撃・・・1年前 日本

ネルフ本部

この日、ようやくエヴァンゲリオン 零号機の機動に成功したのだ  
った、

金髪の女性が実に複雑な表情の元、この成功を報告書にまとめてい  
た。

実験の元になった理論の大半は、ドイツ支部の惣流・キョウコ・ツ  
エッペリン女史が導き出したものだった。彼女は細やかなミスに対  
処しただけ、工学屋ならば、それで十分満足なのだろうが、理学屋  
の気質を多分に持っている彼女にとって自分が理論を構築できなか  
ったという点で悔しさがあり、他人の理論をアレンジしただけとい  
う点に不満があった。

それでも起動に成功したのだ。ドイツ支部に続き、本部もついに稼  
動するエヴァンゲリオンを手に入れ来ることが出来たのだった。

彼女の視界には、強化ガラス越しに 零号機を睨み付けている同僚  
が移っていた。

使途襲撃・・・1月前 タイ 安宿街

タイ バンコクにある安宿街には、色々な物が手に入った。たとえ  
ば、嫌なことを忘れさせてくれる薬物とか、自家製のパスポートとか  
・・・。

その安宿外の薄暗い店で、東洋系の少女がパスポートの複製品を求

めていた。

この時代パスポートの不正防止技術の改善も進められていたが、複製技術も対応していた。

セカンドインパクトの混乱もあって、ある程度の出費を惜しまなければ、別人に成りすますことは可能だった。

使途襲撃：1週間前

強羅温泉にある小綺麗なレストランで貸し切りパーティーが開かれていた。

参加者はたった2名、幼さと斜に構えた雰囲気のみスマッチが印象的なローティーンと思われる少女とその保護者の代理人と思われる大人の女性だった。

子供が食べるには高級すぎる食材と、ポリウムに首をかしげる店側だったが、少女は非常識な程の健啖ぶりを発揮してテンポ良く皿を空にしていた。

「Atozのナンバーズ、一ヶ台5名を含む20名を第三新都に移動させました。他の主だった都市にもメンバーを待機させています。」

大人の女性からの報告に対して、真治はうなずいた。

「教授と蜘蛛は、第三新都に入っている？」

主人の確認に対して、面子の名前を呼び上げていった。

「教授、蜘蛛、閃光、爆弾、顔なしの五名です。」

そう、バランス的には最高だね……。と真治は反応し食事を再開した。

使途襲撃・・・当日

真治と秘書兼愛人の沙希は避難勧告が発令する少し前に第三新都を見渡せる山中の公園にいた。麓のコンビニで買ったサンドイッチを頬張りながら今日のイベントが始まるのを待っていた。

ネルフの指令室には喧騒に満ちていた。予測されていた使徒襲撃だったが、国連軍の砲爆撃がまったく効いていない現状にだれもが不安を隠せなかった。

そんな状況が無理もないと眺める副指令の冬月の元に保安部の人間がやって来た。

碓真治名義のクレジットカードがこの第三新のコンビニで使われたのを確認したので人を派遣したいということだった。

取り急ぎ人を出すことに決め、そして、MAGIを用いて取り寄せた映像には、レイに似た、いや、碓 ユイを連想させる少女が移っていた。

彼は、4年間ほぼ完璧に行方をくらませていた人物の手掛りが、このタイミングで表に出てきたことを偶然とは考えなかった。

その間にも奥の会議室から叫び声にも似た怒声が発せられていた。

「航空隊の戦力では、足止めできません！」

「厚木と人間の戦闘機も全機上げさせた。」

「総力戦だ！ 出し惜しみはなしだ！ 何としても目標をつぶせ。」

使徒に次々に命中するミサイル。しかし、まったく効果がない。

「直撃のはずだ。なぜ効いていない!」

モニター越しの喧騒の中、冬月は場違いに不敵な笑みを漏らしている司令の碇。ゲンドウの傍に歩み寄った。

「・・・ミサイルも駄目、砲爆撃効果も、まるでなしか。」

冬月の、他人事のように呟きに、ゲンドウが答えた。

「通常兵器は、使徒に対して役に立たんよ。」

予想はされていたのだ。

「やはり、ATフィールドか。」

彼らにとっては事実の確認をしているに過ぎなかった。

「15年ぶりだな。」

「ああ、使徒だ。」

そして、真治君名義のカードの件を伝えた。

ゲンドウにしてもこのタイミングに意思を感じないではなかったのだが、使徒迎撃戦の最中しかもN2地雷の傍では打ち手は限られていた。

真治は公園でサンドイッチを口にくわえながら、ミレラルウォータ  
ーの栓を切っていた。

ボトルを逆さにして、水が地面に落ちていく、だが、水は地面には染込まず、まるで、生き物のように脈打ちながら、複雑な文様の円陣、魔法陣を描きながら回っていた。

「沙希さん、なんか税金の無駄遣いっばいね。あれ一発で結構いい車とか買えるんだろっね。」

周りの気配を確認しながら、沙希は答えた。

「ほかに対抗手段がないのです。きっとN2兵器を使用するつもりですよ。」

ちようど、航空機や戦車が間合いを取った。少しして強烈な閃光、爆風が吹き荒れた。

しかし、真治の描いた魔法陣の内側には何の影響も無かった。

沙希はいつもながら物理を超越した力に諦観にも似た畏怖を感じていた。

### 第3話

ネルフ司令部

ゲンドウはモニター越しに軍幹部のやり取りを眺めていた。

「……目標は？」

「……電波障害のため映像では、確認できません」

「あの爆発だ。ケリは、ついているよ」

「爆心地にエネルギー反応」

「何だと！」

火焰の中から使徒が現れ、生体の光球が光っていた。

「映像回復します」

モニターに使徒が映し出された。

「切り札が……なんてことだ」

「化け物が！」

隣にいる冬月がボソッと問いかけた。

「自己修正機能か？」

「単体兵器として修正能力が無ければ話にならんよ。」

モニター越しに軍幹部から連絡が来た。

「いまから、本作戦の指揮権は君に移った。お手並み、見せてもらおう。」

「了解です。」

どうしても納得のいかない將軍の一人が挑むように問い合わせてきた。

「碇君。我々の通常兵器では、目標に対し有効な迎撃手段がないことは認めよう」

「.....」

「だが、君なら勝てるのかね。」

「そのためのネルフです。」

## 山頂公園

あきれたもんだね。とは真治の評価だった。

戦術核相応の火力を喰らって、形をとどめているとは非常識だと呟いた。

焼け爛れた傷が目にはわかる速度で修復されているのを見せられると、

もう笑うしかなかった。

食後のコーヒーを飲みながら待っていると、街のほうから巨大なというより、不恰好なロボットがやって来た。

「ねえ、あれがエヴァンゲリオン、ネルフの切り札だ。でもね、不恰好だね。 巨人同士の一騎打ち、昔の怪獣映画さ。」

真治の気楽な口調と裏腹に、目だけは真剣に両者を見据えていた。

エヴァから初撃、パンチが使徒に当たる前に止まった。両者の間に赤い幾何学様の光が現れ、そして、使徒からの蹴りをもらってエヴァが吹き飛ばされる。

吹っ飛んだエヴァが立ち上がる前に、さらに蹴りが入った。

「全然駄目じゃないか。」

真治の評するように、一方的になぶられていた。頭をふり、右手を上げ使徒に向けて振った。

いきなり使徒が吹っ飛び、側面に陥没が生じていた。エヴァのパイロットはこれを好機と姿勢を建て直し町の方へ撤退していった。

「何やってんだか？ここで追い打たなくて、どうする気だろうね？」

真治の愚痴は、沙希がパイロットの負傷に言及するまで続いた。

ネルフ司令室

司令室は、失望と困惑で埋め尽くされていた。切り札のほずのエヴァが一方的に叩きのめされ、パイロットは負傷し、しかし、敵である使徒は正体不明の攻撃を受けて活動停止中。無力感に打ちのめされている中、作戦指揮官として打てる手を必死で考えていた。しかし、考え付くのは地下都市内でのN2弾頭使用等相打ち前提の品物ばかりだった。

#### 山頂公園

「……、まさかこれで迎撃終わり？」

真治の愚痴には怒りが込められていた。最高級の人材と莫大な予算を注ぎ込んでこれではあまりにもお粗末だった。

ため息とともに、携帯を取り出し、友人に助力を求めた。

「あ、案山子さん。ケース　夕闇の場合を実行してください。」

年不相当の幼い声で返答が戻ってきた。

「準備は出来ているけど、エヴァは動いているんでしょう？　一回しか出来ない切り札なんだから、キープしたほうが良いんじゃない？」

その意見には真治もまったく同意見だったが、

「迎撃機に乗ったパイロットがへぼ過ぎです。動いていない状況と変わりありません。」

事情はわかったから、準備に15分はよこせと通話は終わった。

## 第4話

再度の自己修復を終え、使途は移動を再開した。

ネルフ司令部

「主電源ストップ。電圧ゼロです」

指令室の電源が唐突に落ちた。

この非常時に外の情報から隔離され暗闇に投げ出された指令室の主人は、この事態を引き越した相手に殺意を募らせていた。

嫌がらせをかますにしても、状況を選べと。

山頂公園

「さすが案山子さんだ。」

10分もしない内にかかってきた関東一円の監視網を無力化したという連絡に真治は素直に称賛を送った。

案山子は、今から10分だけならば完全に電子的な監視網を無力化できると保証した。

真治の経験から、案山子の保証には十分な安全値が組み込まれていることを知っていたが

相手はネルフのMAGIシステム、時間はかけなければいけないほど良いに決まっていた。

もう一度、真治の腕が使途に向けられた。彼の足もとにある魔方陣の上で水が波打っていた。

今度は全力の一撃だった。ハンマーでガラス窓を叩いたような破裂音とともに、使途の持つ防御能力を叩き割り、使途の体を強烈に陥没させ、吹っ飛ばした。

使途の重量と叩きつけられた際の勢いで、ビルがビリヤードのピンのように倒れていった。

真治は痙攣している使途に向けて今度は拳を振りおろす仕草をした。

ベキリ・・・

空き缶を踏みつぶすような音とともに使途が軋んだ。

「こんなげやれば、1ヶ月ぐらいは稼げるかな？」

自信無さ気な真治の声が響いた。

ネルフ司令室

突然の停電から回復したモニターには、半壊し、それでも修復を始める使途の姿が映っていた。

外の状況を確認できなかったわづかな時間で何者かが何らかの方法で使途を攻撃したのだろう。つくづく頭に来る話だった。

なぜ、止めを刺さずに中途半端な状態で放置するのだ。嫌がらせとしか思えなかった。

「碇、俺たち以外にもシナリオを描きたがっている奴がいるぞ。」

冬月の呻きに

「だが、時間は稼げる。我々にもシナリオを修正する時間がある。問題ない。」

碇が律儀に答えを返した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0653/>

---

宵闇のEVA

2010年11月12日11時24分発行